

中世期日本語資料にみられる接続詞の機能

百瀬 みのり

1. 研究動機・背景

日本語が古代語から近代語へと移行した中世期には、音韻、語彙、文法などあらゆる面においての変化が見られる。中でも接続詞の一品詞としての成立は、日本語の近代語化に寄与するところの大きい変化である。この接続詞について、成立事情と共にその機能について通時的に考えてみたい。

2. 現在の研究

現在行っている研究は以下の三点である。

- ① 接続詞の成立一どのようなことが要請要因となつて接続詞が成立したのかを探る。
- ② 接続詞の機能一語と語、文と文、文章と文章をつなぐことのほかに、接続詞もつ機能を調べる。また、なぜそのような機能をもつに至ったのかについても考える。
- ③ 接続詞の運用一特に談話資料中における接続詞に

は、何らかの標識としてそれが用いられることが非常に多い。接続詞はどのような談話標識(ディスコースマーカー)として使用されることがあるのか、その理由や効能についても考える。

3. 今後の展望

ただ今、「つなぐ」こと以外の接続詞の機能に非常に興味をもっている。

接続詞には、言語情報を「つなぐ」こととは正反対に、それを「区切る」機能や、情報を受け手に予め「知らせる」、予報的な機能もある。それらの詳しいところを資料中の用例と共に研究してみたい。また、接続詞がそのような機能をもつ意味についても考えていく。

(了)

ももせ みのり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

歌舞伎テキストにおける義太夫節の機能

井之浦 菜里

1. 研究動機・背景

もとは人形浄瑠璃の演目である作品を歌舞伎に移入して上演した作品(『仮名手本忠臣蔵』『義経千本桜』など)は丸本歌舞伎(または義太夫狂言とも)と呼ばれる。人形浄瑠璃では人物の台詞も地の文もすべて義太夫節で語られるが、歌舞伎に移行した場合には台詞は役者が、地の文は義太夫節の太夫が語るという形式が採られる。しかし、台詞となりうるような内容を義太夫節が語ったり、台詞と義太夫節の交互の掛け合いによって一つの文章が成り立つようになっていたり、義太夫節には地の文を語るということ以上にさまざまな役割があると考えられる。また、義太夫節には引用、くりかえし、言い換え、オノマトベなど注目すべき表現が多用されている。それらを分析し、義太夫節の機能や性質を明らかにすることが研究の狙いである。

2. 現在の研究

現在、行っている研究は以下の三点である。

- 一点目は、ある演目内での義太夫節と台詞の言語量の調査と義太夫節の出現パターンの分析。
- 二点目は、義太夫節の表現(引用、くりかえしなど)の分析。
- 三点目は、義太夫節が登場人物の台詞となりうるような内容を語ったり、登場人物の心情、心境、思考を語ったりしている箇所分析。

3. 今後の展望

義太夫節の語りの役割や必要性を浮き彫りにするために、純歌舞伎(義太夫節のない演目)との比較を、また人形浄瑠璃から歌舞伎への移入によって義太夫節部分にどんな現象が起きているかを調べるために同演目における歌舞伎台本と人形浄瑠璃台本の比較を行い